

令和3年度 入学試験問題

国語

※試験開始のチャイムや合図があるまで開かないこと

〔注意事項〕

1. 問題用紙は、10ページまでである。
2. 解答は、すべて別紙の解答用紙の所定欄に記入すること。
3. 解答用紙への記入は、試験開始後に記入すること。
4. 解答用紙には出身中学校・受験番号・氏名を必ず記入すること。
5. 試験開始の30分後から退場はできるが、解答用紙は必ず裏返して退場すること。
6. 問題用紙は、各自で持ち帰ること。

常磐高等学校

次は太郎さんが【新聞記事の一部】を見て、花子さんと話をしている部分である。これらを読んで後の各問に答えよ。

【新聞記事の一部】

【 A 】動植物の被害を防ぐ

強毒を持つ南米原産のヒアリが国内各地の港で相次いで見つっている。ヒアリは外来種の中でも特に注意が必要な特定外来生物に指定され、駆除が進められている。外来生物による被害を防ぐ特定外来生物被害防止法は二〇〇五年六月に施行された。日本にもともと生息する【 A 】の動植物に悪影響をもたらす外来種を指定して、輸入やうんぱん、飼育などを原則禁止とする。国や地方自治体は野外で繁殖する指定種を駆除できる内容を盛り込んだ。

（省略）

特定外来生物の指定は一四八種類にまで増えた。国際貿易は年々活発になっており、水際対策の重要性は、一層高まっている。「入れない」「捨てない」「広げない」の三原則の徹底が大切だ。

（日本経済新聞による。一部改変）



太郎

ヒアリ以外の特定外来生物には他にどのようなものがあるのかな。

カミツキガメも特定外来生物に指定されているよ。特定外来生物に指定されていなくても、外来生物の中にはペットとして輸入されたものを飼い主が放棄して自然の中で個体数が増え、日本の生態系に影響を与えている例もあるみたいだね。



花子



太郎

今後珍しいペットを飼う際には、特定外来生物に指定されていないか、きちんと育てられるかにますます注意が必要だね。

問一 うんぱんに適切な漢字をあて、楷書で書け。

問二 水際の漢字の読みを、平仮名で書け。

問三 会話文中の ますます の類義語を、【新聞記事の一部】からそのまま抜き出して書け。

問四 【 A 】にあてはまるように 外来の対義語を書け。

問五 徹底の「徹」を楷書で書いた場合の総画数と、次の1～4の行書の漢字を楷書で書いた場合の総画数が同じものを一つ選び、その番号を書け。

- 1 積 2 龍 3 踊 4 暴

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

読書すること、あるいは学問をすることの意味とは何なのだろうか。一般には、これまで知らなかった知識を得ることという答えが返ってきてそうだが、読書の〈意味〉、学問の〈意味〉というものを考えたとき、その答えだけでは十分ではないだろうと私は考えている。

読書によって、あるいは学ぶということによって、確かに新しい知識が自分のものとなる。しかし読書や学問をすることの〈意味〉は、端的に言って、自分がそれまで何も知らない存在であったことを初めて知る、そこに〈意味〉があるのだと思う。ある知識を得ることは、そんな知識も持っていなかった〈私〉を新たに発見することなのだ。

私一人の身体のなかに地球15周分もの細胞が詰まっていると知ることは、そんなにすごい存在だったのかと感動することは、そんなことも知らない自分であったということ、改めて知ることからくる感動なのだ。初めから何でも知っていたら、感動などは生まれない。「知らない存在としての自分を知る」こと、学問はそこから出発する。

自分の知っていることは世界のほんの一部にしか過ぎないのだと自覚する、それはすなわち自分という存在の相対化ということである。それを自覚しないあいだは、自分が絶対だと思いがちである。自分だけしか見えていない。世界は自分のために回っているような錯覚を持つ。

自分は〈まだ〉何も知らない存在なのだと知ることによって、相手と自分との関係も見えてくるだろうし、世界のなかでの自分が存在することの意味も考えることになるだろう。私は〈まだ〉何も知らないと自覚することは、いまから世界を見ることができるということでもある。それが学問のモチベーションになり、駆動力になる。

(A)

「何も知らない自分」を知らないで、ただ日常を普通に生きていることに満足、充足しているところからは、^あ取返してしんどい作業を伴う学問、研究などへの興味もモチベーションも生まれないのは当然である。しかし、ああ、自分は実は世界のほんのちっぽけな一部しかこれまで見てこなかった、知っていなかったと実感できれば、そして自分がこれまで知らなかった世界がいかに驚異に満ち、知る喜びにあふれていることを垣間見ることができれば、おのずから知ることに対する敬意、リスペクトの思いにつながるはずである。

こんなちっぽけな私の身体のなかには、地球15周分もの細胞が詰まっているのだという驚きと感動、その驚きは必ず自分という存在を見る目に変更を迫るはずである。自分という存在を尊厳の思いとともに見ることのできる基盤ができることもあるが、いっぽうで、このまま何も知らずに人生を漫然と送っている、こんな喜びに出会えないだけでも大きな損だろうと思えば、シメタものである。

(B)

わが家に小さな子どもがやってきた。まだ一歳にもならない女の子である。世の中では孫と呼ぶらしいが、それが可愛いのである。

見ているといくつも発見がある。自分の子のときには見えていなかったことばかりである。彼女は世界の中心にいる。天動説のようなもので、自分では何もしくなくても、すべてが彼女のまわりをまわっている。世界を所有し、世界は包んでくられても、対峙^{たいじ}することはない。

保育園や幼稚園に行くようになって、同じような年齢層の〈他者〉に初めて出会うことになる。ここで〈他者〉を知ることが、すなわち自

分という存在を意識する最初の経験となるのだろう。世界は自分のためだけにまわっているのではないことを初めて知る。〈他者〉を知ることによって初めて〈自己〉というものの意識が芽生える。「自我のめばえ」は、〈他者〉によって意識される〈自己〉への視線である。自分を外から見るという経験、これはすなわち学ぶということの最初の経験なのである。

こんなことを考えている人がいたのかと思う。こんなひたすらな愛があったのか、こんな辛い別れがあるのかと、小説に涙ぐむ。それらは「読む」という行為の以前には、知らなかった世界ばかりである。それを知るということは、すなわち「それを知らなかった自分」を知るということである。一冊の書物を読めば、その分、自分を見る新しい視線が自分のなかに生まれる。〈自己〉の相対化とはそういうことである。

(C)

勉強するのは、そのためである。読書にしても、勉強にしても、それは知識を広げるということも確かにその通りだが、もっと大切なことは、自分を客観的に眺めるための、新しい場所を獲得するという意味のほうが大きい。小さな子が他者と出会って初めて自分に気づいたように、私たちは〈自己〉をいろいろな角度から見るための、複数の視線を得るために、勉強をし、読書をする。それを欠くと、ひとりよがりの自分を抜け出すことができない。〈他者〉との関係性を築くことができない。

(D)

「こんなことも知らなかった自分」を知るということは、「知へのリスペクト」という点からとても重要である。一つの化学的事実が明らかになるまでに、どれだけの時間がかかり、どれだけの人々のたゆまぬ努力が要求されたのか。今という時代にあつては、当たりまえとも思えるような事実が、正しいものとして定着するためには、どれほどの時間がかかり、どのような実験や理論構築を経てなされたものなのか、それらをつぶさに知ることによってのみ、私たちは、通常いともたやすく口にしてしまいやすい〈真理〉というものに対する敬意を持つことが可能になる。

(E)

(永田和宏『知の体力』による。一部改変)

(注) モチベーション：物事を行う意欲。

リスペクト：尊敬すること。敬意を示すこと。

天動説：地球は宇宙の中心に静止し、すべての天体は地球のまわりを回転しているとする説。

問一 本文中に「読書をする」とあるのは、学問をすることの意味とあるが、そのことについての書き手の考えが書かれているのはどこまでか。最も適当なものを、本文中の(A)～(E)のうちから一つ選び、その記号を書け。

問二 本文中の「こんなことも知らなかった自分」を知る とあるが、言い換えて何と表現しているか、本文中から八字でそのまま抜き出して書け。

問三 左の表は、本文に述べられている「知らない存在としての自分を知る」と「何も知らない自分」の相違についてまとめたものである。
 「ア」「イ」に入る最も適当な語句を、「ア」は三字で、「イ」は六字で本文中からそのまま抜き出して書け。

学問	「自分を知る」ことから学問は始まり、今から多くのことを知ることができるという学問への 【ア】になる。	日常を普通に生きていることに満足、充足しており、学問、研究などへの興味もモチベーションも生まれない。	「何も知らない自分」
対人	学ぶということの最初の経験は〈他者〉と出会い、〈他者〉をすることであり、それが 【イ】につながる。	自分では何もしなくても、世界は自分のために回っているような錯覚を持つ、天動説のようなもの。	

問四 この文章の内容について説明した文として最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

- 1 学問の「意味」は、身体のなかに地球15周分もの細胞が詰まっていると知ることだと提唱している。
- 2 読書や学問がどれほど大切なことか、筆者の子どもと孫への育て方を比較して切実に訴えている。
- 3 学ぶということの第一歩は、他者に出会い何も知らなかった自分を発見することだと主張している。
- 4 読書や学問の「意味」は、化学的事実を明らかにしたり知識を得るためだけに必要と述べている。

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

① 禅智内供の鼻と言へば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇の上から頤の下まで下っている。形は元も先も同じように太い。言わば細長い腸詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下っているのである。

五十歳を越えた内供は、沙弥の昔から、内道場供奉の職に陞った今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論表面では、今でもさほど気にならないような顔をしてすましている。これは専念に当来の浄土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思ったからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を気にしていると云う事を、人に知られるのが嫌だったからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云う語が出て来るのを何よりも惧れていた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。――一つは實際的に、鼻の長いのが不便だったからである。第一飯を食う時にも独りでは食えない。独りで食へば、鼻の先が鉢の中の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う事にした。しかしこうして飯を食うと言ふ事は、持上げている弟子にとつても、持上げられている内供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるえて、鼻を粥の中へ落した話は、当時京都まで喧伝された。――けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重なる理由ではない。内供は実にこの鼻によつて傷つけられる **A** のために苦しんだのである。

② 池の尾の町の者は、こう言ふ鼻をしている禅智内供のために、内供の俗でない事を仕合せだと言つた。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中にはまた、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さえあつた。しかし内供は、自分が僧であるために、幾分でもこの鼻に煩される事が少くなつたと思つていない。内供の **A** は、妻帯と云ふような結果的な事実には左右されるためには、余りにデリケートに出来ていたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この **A** の毀損を回復しようと試みた。

③ 第一に内供の考へたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。これは人のいない時に、鏡へ向つて、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝らして見た。どうかすると、顔の位置を換えるだけでは、安心が出来なくなつて、頬杖をついたり頤の先へ指をあてがったりして、根気よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自分でも満足するほど、鼻が短く見えた事は、これまでにただの一度もない。時によると、苦心すればするほど、かえつて長く見えるような気さへした。内供は、こう言ふ時には、鏡を箱へしまいながら、今更のようにため息をついて、不承不承にまた元の経机へ、観音經をよみに帰るのである。

④ それからまた内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。池の尾の寺は、僧供講説などのしばしば行われる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て続いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしている。従つてここへ出入する僧俗の類も甚だ多い。内供はこう言ふ人々の顔を根気よく物色した。内供の眼には、紺の水干も白の帷子もはいらない。まして柑子色の帽子や、椎鈍の法衣などは、見慣れているだけに、有れども無

きが如くである。内供は人を見ずに、ただ、鼻を見た。——しかし鍵鼻はあっても、内供のような鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度重なるに従って、内供の心は次第にまた不快になった。内供が人と話しながら、思わずぶらりと下っている鼻の先をつまんで見て、年甲斐もなく顔を赤らめたのは、全くこの不快に動かされての所為である。

最後に、内供は、内典外典の中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようと思つた事がある。けれども、目連や、舍利弗の鼻が長かつたとは、どの経文にも書いてない。勿論竜樹や馬鳴も、人並の鼻を備えた菩薩である。内供は、震旦の話の序に蜀漢の劉玄德の耳が長かつたと言ふ事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どのくらい自分は心細くなるだろうと思つた。

内供がこう言う **B** な苦心をしながらも、一方ではまた、 **C** に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに言うまでもない。内供はこの方面でもほとんど出来るだけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある。鼠の尿を鼻へなすって見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと唇の上にぶら下げているではないか。

(芥川龍之介『鼻』による。一部改変)

(注) 寸…長さの単位。一寸は約3・03センチ。

内道場供奉…宮中での仏事や祭礼などのお供の行列に加わること。

鉢…金属製の椀。 尺…長さの単位。一尺は約30・3センチ。

嚏…くしゃみ。 毀損…利益や対面などをそこなうこと。

水干…のりを使わないで水張りにして干した布。

内典外典…仏教の教えや信仰の規範が記された書物。

沙弥…出家して修行をしている男性の僧。

渴仰…深く仏を信仰すること。

中童子…寺で給仕や高層の雑用に使った12、3歳の少年。

僧供講説…僧に対する供養で、仏典などについて説明すること。

帷子…裏を付けない衣服の総称。 椎鈍…樹皮からとった染料で染めた色。

震旦…中国のこと。 蜀漢…中国(三国の一)のこと。

問一 本文中に 池の尾で知らない者はない ^①とあるが、このことが具体的にわかる一文を本文中から抜き出し、その初めの五字を抜き出せ。

問二 本文中に 内供の俗でない事を仕合せだと言った ^②とあるが、これを説明したものとして最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

- 1 禅智内供のことを尊敬している一方で、自分も出家したかったと妬ましく思っている。
- 2 禅智内供のことを表面的には気づかっているが、心の中では笑い者だと思っている。
- 3 禅智内供のことある意味仕合せだと思っているが、妻になる女を紹介したいと思っている。
- 4 禅智内供のことを僧として立派な人物だと認めているが、容姿は最低だと思っている。

問三 本文中の A ～ C に入る最も適切な語句を、次の1～4のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を書け。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| A | 1 | 好奇心 | 2 | 羞恥心 | 3 | 自尊心 | 4 | 競争心 |
| B | 1 | 積極的 | 2 | 消極的 | 3 | 意欲的 | 4 | 反抗的 |
| C | 1 | 積極的 | 2 | 消極的 | 3 | 意欲的 | 4 | 反抗的 |

問四 本文中に 人のいない時 ^③とあるがそれはなぜか。その理由と思われる箇所を本文中より三十字以内で抜き出し、その初めの五字を書け。

問五 本文中に 人の鼻を気にしていた ^④とあるがそれはなぜか。四十字以内で答えよ。

四

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

迎えの天人が、雲に乗り翁の家に下りてきた。別れを嘆く翁を残し、いよいよかぐや姫は月世界に昇ることとなった。

天人の中に、持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。またあるは、不死の薬入れり。一人の天人いふ、A「壺なる御薬たてまつれ。穢きたなき所の物きこしめしたれば、御心地悪あしからむものぞ」とて、持て寄りたれば、いささかなめたまひて、すこし、形見とて脱ぎ置く衣に包まむとすれば、ある天人包ませず。御衣みぞをとりいでて着せむとす。その時に、かぐや姫、「しばし待て」といふ。B「衣着せつる人は、心異ことになりといふ。もの一言いひ置くべきことありけり」といひて、文書ふみく。天人、「遅し」と、心もとながりたまふ。かぐや姫、「物知らぬこと、なのたまひそ」とて、いみじく静かに、朝廷おおやけに御文奉りたまふ。

〔『竹取物語』による。一部改変〕

(注) きこしめしたれば…お食べになられたので いささか…少し 着せつる人…着た人 異になる…変わってしまった

心もとながり…イライラして なのたまひそ…おつしやるな いみじく…たいそう 朝廷…帝 奉りたまふ…お書きもうしあげる

問一 本文中の なめたまひて の読み方を、全て現代仮名遣いに直し、平仮名で書け。

問二 次の の中は、本文を読んだ松本さんと田中さんと先生の会話の一部である。

先生 この場面では、かぐや姫と迎えに来た天人とのやりとりが書かれていますね。そこからかぐや姫と天人の気持ちのズレがどのようなものか、みんなで話し合ってみましょう。

松本さん 天人は地上のことを「穢きたなき所」と言っているのです、月の世界はとても清浄な所だと思います。

田中さん だから天人は月の世界にかぐや姫を早く連れて帰ろうとしているのですね。

松本さん かぐや姫は、天人に止められてしまうのですが、長い間育ててもらった翁に（ ）を形見として衣に包んで残そうとしています。

田中さん 他にも心残りがあり、それを果たそうとしていますね。天人を制止する言葉にその思いが感じられます。

先生 そうですね。かぐや姫は、このあと天の羽衣を着る前にその思いを行動に移しています。

(1) の中の かぐや姫を早く連れて帰ろう とする天人の様子が書かれている一文を本文中からそのまま抜き出し、その初めの五字を書け。

(2) の中の () に入る語句を本文中から五字以内で抜き出して書け。

(3) の中の 心残りがあり、それを果たそうとして とった行動の説明として最も適当なものを 1 ～ 4 のうちから一つ選び、その番号を書け。

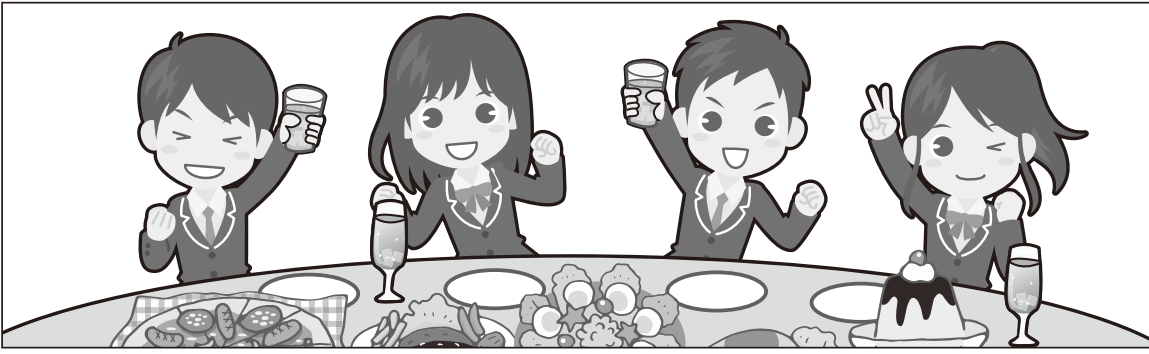
- 1 かぐや姫が貴公子に手紙を書いた。
- 2 かぐや姫が姫に手紙を書いた。
- 3 かぐや姫が翁に手紙を書いた。
- 4 かぐや姫が帝に手紙を書いた。

問三 本文中の A、B の「」は誰の言葉か。組み合わせとして最も適当なものを、次の 1 ～ 4 のうちから一つ選び、その番号を書け。

- | | | | | |
|---|---|----|---|------|
| 1 | A | 天人 | B | 天人 |
| 2 | A | 天人 | B | かぐや姫 |
| 3 | A | 帝 | B | 帝 |
| 4 | A | 帝 | B | 翁 |

五

三上さんの中学校の保健委員会では、感染症予防のため学校行事が中止になる中「コロナ禍での余暇の過ごし方」について全校生徒に注意を呼びかけることになりました。後の問に答えよ。



問

三上さんたちは全校生徒へ感染症予防を呼びかけようと思っています。生徒の集まっているイラストを参考にしてあなたならどのように呼びかけるか。次の**条件1**から**条件4**に従い、作文せよ。

条件1 文章は二段構成とする。

条件2 第一段落には、あなたが最も注意を呼びかけたいことをイラストを見て具体的に一つ書くこと。

条件3 第二段落には、第一段落の注意を踏まえ、あなたが具体的にどのような点に注意しているかを書くこと。

条件4 題名と氏名は書かず、原稿用紙の正しい使い方に従い、十行以上、十二行以内で書くこと。